

板倉智敏先生語録集
「努力に勝る天才はなし」



2010年*月

鳥取大学家畜病理学教室同門会編

2009年の初秋、鳥取市内で百四十数回目の獣医学会が開催された折に、吉岡温泉で家畜病理学教室・獣医病理学教室の同門会が催されました。例によって一人ずつ自己紹介をしていく中で、V57のF君が板倉先生の思い出として、次のような体験を話してくれました。

『日曜日に教室に出て行くと先生が出勤しておられました。まあお邪魔をしても悪いかと思い、挨拶をしなかったところ、先生から「F君、日曜は挨拶も日曜日か」と声をかけられました』

座は大爆笑でした。ただその時、こういう板倉先生の機知に富んだお言葉を同門の方々もご存知ではないかと思いました。そして、機会があれば門下生皆さんとひろく共有すべきと考えていました。丁度タイミングよく関西同門会が開催されることになり、その場を拝借して板倉先生のお言葉を蒐集し、まとめて冊子とし後世に残したいと企画しました。ところが、この計画を進めていくうちにballoonは益々膨張して、関西だけに留まらず、関東同門会とcombineさせさらに充実したものに仕上げなくてはならないとの考えに至りました。ですから、今回は中間報告として、この同門会に参加された方々に一端を紹介させていただきます。これからも思い出されたお言葉があれば、随時編集担当までご連絡ください。お言葉をお寄せいただいた同門生のお名前は、すべてあとがきに掲載させていただきます。どうかよろしくお願ひします。

編集担当；V52 勝田 修（〒631-0077 奈良市富雄川西 1-18-9; e-mail, osamu.katsuta@santen.co.jp)



I) 朝礼で

毎週月曜と木曜の8時半から、図書室で朝礼がありました。教室全員のお茶をいれ、先生をおよびするのが3年生の役目でした。大学院生の中には、その時どんな話題をするか前もって準備していた方も居られました。

「来るものは拒まず、去るものは追わず」

一番多くの方から寄せられました。きっと、先生は熟思されてのことだったものと推察します。

「少しはお酒をひかえたらどうかね」

遅刻することが多いと、叱咤されました。若気の至りで前夜つい深酒をすると、翌朝起きるのがつらかったです。

II) 研究室で

組織標本に埃が混じらないよう、清掃を丁寧に行うことを指導されました。棧を指でなぞって埃が残っていないか確認しておられました。

「T君、帰れよ！」

二日酔いで研究室に行って、顕微鏡の前で居眠りし、目の周りに接眼レンズのアザを付けつつ熟睡していたところ、板倉先生が巡回に来られて、このように言われたのには本当にこたえました。もちろん、すぐに下宿に帰り、夕方、研究室に戻って教授室まで謝罪に行き、ノックする時の緊張感は今でも忘れません。

「三日仕事をしないように！」

薄切が3日目になるとよく指導されました。だらだらした仕事はしない、集中して短時間で終わらせるようにとのこと。同様のお言葉を内科の先生からもいただきました。「遅いことはウシでもできる」。

「君、大事な所見を見落としているよ」

ヒナの脳軟化巣を見落としていました。

「君、顕微鏡を見るのは心眼でだよ」

病理組織は学生には難しかったです。

「王様のように座っていないで、君も仕事をしろよ」

新任の先生にも厳しく指導されました。

「組織写真を撮っていて切片にepithelなどのゴミが載っていると、作った学生を叱りたくなる」

「写真はこうやって撮るんだよ」

卒論に載せる写真は先生に撮影していただいていた。フォーカスや露出、現像ムラなど細かく指導されました。暗室は整理、整頓、清掃、清潔がもつとうでした。後々になってその大切さが判った次第です。

III) 剖検時に

板倉先生のつぶやきを覚えています。先輩の卒論実験用に入荷したブロイラーのヒナがケージの隙間から抜け出して、床を歩き回っているのをみて、

「おとなしくしないと、殺処分になるよ」

愛情たっぷりでした。

国内最大手のサーカス団からゾウの剖検を依頼された時のこと。マスコミが大勢来て、先生はインタビューを受けておられました。先生の写真を撮りたいといわれて、

「病理屋は死体を扱う者なんだから表には出ない」

なるほど、そういうものかと思いました。

少し長くなります。

「犬はいいけど猫はねェ。たたられて何か悪いこと起こりそうでイヤだね・・・」

ネコの安楽死剖検が来た時。苦しそうでもなく、外傷があるわけでもない。後軀に麻痺はあったが強直性ではなく間代性だったので、コクサッキーウイルスによる脳脊髄炎を疑って、先生に「中枢性のものだと思いますし、全身解剖しても恐らく病変が見えないと思います。Cuffing はみえますが、lymphocyte のほかに plasma cell がいますから、命には別状はなく回復すると思いますので、もう少し観察させてください」と推測だけのいい加減な所見を付けて頼みに行ったら、先ほどのお言葉をいただいた。「じゃあ頼むよ」と言っただき、そのネコは回復し開業医さんの処で飼い主に返された。

生意気な学生の気持ちをよく酌んでくださいました。

IV) コンパの折

ウシの剖検が数頭あった日は、院生が気を利かせて「先生、今日は学生が飲みたいといっています」。先生は「うむ」とだけ言われて、夕方から図書室で飲み会になりました。延々と続く宴会ではなく、程よいところでお開きになりました。後片付けは全員でやったと思います。たまに二次会にいくと、

「ハイボール」

先生が注文される「僕はハイボール！」田舎育ちの私にとり、とても新鮮で都会的な香りと響きの「ハイボール」。どんなステキな飲み物だろうと、ずうっと思っていました。アカデミックな思い出でなくてスママセン。

IV) 帰宅される時

「さいなら」

これは定番でした。いつも決まって7時から7時半の間に帰宅されるときに、研究室のドアを開けて、おっしゃられました。この時刻を過ぎても先生が部屋のドアを開けられない日がありました。「ストーブのガス漏れで、倒れておられるのでは？誰か見て来

い」ということになり、愛嬌のある院生が代表でチェックに行くと、論文を書いておられたとのことでした。(国内初発の子豚のオーエスキー病)

先生が帰宅されてからは、家畜病理学教室が家畜料理学教室に変身して先輩方からいろんな料理、特に冷蔵庫にたくさんあった卵の料理を教わりました。フレンチトーストを作りながら、公務員試験の勉強をしていた先輩を思い出します。

V) 卒業してから

卒業生が教室を訪問されると、先生はいつも大いに歓待されました。

「僕は卒業生を大事にするよ。学生には厳しいけどな」

卒業してから随分お世話になりましたが、在校生にも研究室紹介では、

「研究室の卒業生に優秀な人が多い」と言われていたそうです。また、3年生のとき実習に行かせてもらっていなければ、きっと今の自分はいません。鳥大の先輩に電話をしてくださり、1ヶ月近く実習に行ったのが現在の仕事に就くきっかけだったという同門生もおられます。

卒業して3年目、今年も論文が書けませんでしたと、苦し紛れの手紙をお出ししたら、**「人と同じことをしているから何もできない。他の人が寝ている時に勉強しなさい。遊んでいる時に勉強しなさい」**とアドバイスを戴きました。何だ、受験勉強と一緒にではないかと思い、一大奮起しました。先生から頂戴したその葉書は、いつも通勤鞆の中に入っています。

以上が、蒐集した板倉先生語録です。これからも思い出された方はとりあえず、編集委員にご一報ください。よろしくお願いします。

企画・編集；勝田 修、監修；説田 景

VI) お言葉をお寄せ戴いた方々 (五十音順、敬称略)

天橋一路、伊藤健介、井戸川博一、内本啓史、江見(黒坂)葉子、勝田 修、金谷(中島)順子、當内(説田)景、濱野雅子、松尾(堀川)和美、山中盛正、義澤克彦

